

ていね地名考

地域の個性が輝き、まちの元気がみなぎる、わたしたちの“ふるさと手稲”。

昔は何もなかったこの地に、先人たちは多くの苦勞をしながらも、自然の恵みを生かし、豊かな大地へと開拓を続けてきました。

その開拓への情熱は、今もていねの各地名に込められています。

今月は、その地名の由来などを、昔の写真と併せてご紹介します。

ていねの地名に脈々と息づく、先人の開拓への思いにふれてみませんか。

▲北海道工業大学屋上から見た昭和54年頃の手稲の街並み



▲前田農場

前田

前田の名称は、明治28年、旧加賀藩主・前田利嗣侯が「前田農場」を創立したことに由来しています。

この農場は、新川大排水（現在の新川）とこれにつながる中小の排水路の建設によって次第に農耕地が広がっていきました。この前田農場の成功に力を得て、明治農場、興農園（後の極東農場）などの農場もできました。

新発寒

新発寒は、分区前は「発寒」という地名で、発寒は、安政4年に在住武士が稲荷街道の両側（現在の発寒神社周辺）に移住したのが始まりです。発寒の名称はアイヌ語の「ハチャム・ペツ」（ムクドリのある川）に由来するという説もありますが、今なお疑問の多い地名です。

西宮の沢

西宮の沢は、分区前は「宮の沢」という地名で、明治5年に移住した仙台白石藩の武士たちが開拓を始めました。宮の沢の名称は、この地区に神社が建てられたことに由来すると言われています。

富丘

富丘は、開拓当初から札幌と小樽の中継点として重要視され、明治4年、開拓使がサントロペツ通行屋を設け、札幌本府を往来する役人や旅人たちの休憩所・宿泊所として栄えました。富丘の名称は、開拓者の理想を表したものとされています。

手稲本町

手稲本町は、いつごろから開けたのか定かではありませんが、明治4年に隣接の稲穂地区に4、5戸の移住者があつたこと、同年に隣接の富丘地区に開拓者がサントロペツ通行屋を設けていたことから、明治の初めから開けていたと想像できます。

この地区は、昭和17年の字改正まで軽川と呼ばれていました。



木造だった頃の手稲駅舎▶